

# 大学生が授業理解を深めるための図画工作科・美術科の単元づくりに関する一考察

—— 中学校美術科教員を対象とする質問紙調査結果をきっかけとして ——

相田 隆司<sup>\*1</sup>・立川 泰史<sup>\*2</sup>・大櫃 重剛<sup>\*3</sup>・濱脇 みどり<sup>\*4</sup>・  
大根田 友萌<sup>\*5</sup>・西村 德行<sup>\*6</sup>

美術科教育学分野

(2019年6月19日受理)

AIDA, T., TACHIKAWA, Y., OBITSU, S., HAMAWAKI, M., OHNEDA, T. and NISHIMURA, T.: Creation of a teaching unit for the subjects of Drawing & Crafts and Art to promote university students' better understanding of class design: Using the results of a questionnaire study of junior high school art teachers. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 71: 57-67. (2019)

ISSN 2434-9399

## Abstract

This study contemplates how good teaching units are created, the findings of which would enable university students to better understand class planning. Based on a selected learning theme (communication), presented in a questionnaire study that involved junior high school art teachers in Metropolitan Tokyo, I examined examples of teaching units created by experienced teachers. It became clear that experienced teachers have an excellent understanding of and ability to contextualize the learning theme, and that their insights are expressed in the artistic and creative activities they choose, how they explore them, and how they structure their classes.

**Keywords:** Teacher Education, Experienced Teachers, Art Education

*Department of Art Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究は、大学生がより授業理解を深めるための単元づくりに関する考察である。東京都の中学校美術科教員を対象として実施した質問紙調査から、抽出した学習主題である「コミュニケーション」をもとに、熟達した教員が作成した単元例を考察した。熟達した教員の単元では、彼らの学習主題への深い理解や解釈が、美術や表現活動内容の選択、探究方法の設定や授業構造と密接に関連していることが明らかとなった。

\*1 東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

\*2 東京家政学院大学 (194-0292 町田市相原町 2600)

\*3 東京学芸大学 附属世田谷小学校 (158-0081 世田谷区深沢 4-10-1)

\*4 東京都西東京市立青嵐中学校 (202-0003 西東京市北町 2-13-17)

\*5 東京学芸大学 附属小金井中学校 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

\*6 東京学芸大学 総合教育科学系 教育実践創成講座 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

## 1. 本研究の目的

今後の我が国の教育は、社会に開かれた教育課程の実現を目指すとして、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要」<sup>1)</sup>であるとの見解が示されている。また、教育課程部会芸術ワーキンググループ資料<sup>2)</sup>によれば、「芸術科目における知識」について、「知識が個別の感じ方や考え方等に応じて構造化されることや、さらに新たな学習過程を経験することを通じて再構築され、知識が更新されていくことが重要である」とその特性が述べられている。今後図画工作科や美術科を担当することになる学生達は、これらの要件を踏まえながら「より深い学び」を実現する学習を準備する能力が求められることになると考えられる。筆者らはこれまで、授業理解を深めるための教員養成学部生に向けた授業のあり方について研究を行ってきたが、<sup>3)</sup>その主たる内容や方法は、熟練した教員の持つ価値観と題材の関係性に注目し、教員養成学部生に熟練した現職教員自らがその価値観をもっとも反映していると考えられる題材を扱う授業を経験させ、学生の授業理解の様相について考察を行うことであった。事例から確認できた成果として、①優れた主題と授業に備わる観点や方略、価値観や態度から抽出したキーワードによる学生同士の相互評価によって、授業を理解する際に必要となる視点である学習内容・方法、教育環境、主題等の吟味や精選に関する事項に気づかせることができたと考えられること、②熟練した教員の授業にはコンセプトやテーマが存在し、授業過程が丁寧につくり込まれ、洗練されていることに気づかせることができたと考えられることがあげられた。

本研究の目的は、大学生の授業理解を深めるための単元づくりに関する考察であり、東京都の中学校美術科教員を対象として実施した質問紙調査における、今後扱ってみたい単元についての調査結果の考察から抽出した主題である「コミュニケーション」をもとに熟達した教員が作成した単元例を考察することである。そして、そのことを通してより汎用的な大学生が授業理解を深めるための単元の要件の確認が目指される。

## 2. 質問紙調査の概要

本研究では、現職の中学校美術科教員の意識を把握するため、質問紙調査を行った。複数の質問項目の中から、扱ってみたい単元についての質問に関する結果の提示と考察を行う。

### 2. 1 調査期間

2018年8月2日～8月24日（消印有効）

### 2. 2 調査対象

東京都公立中学校 美術科担当者306校 回収：72件（抽出・郵送法 回収率24%）

### 2. 3 質問項目

#### 2. 3. 1 属性

年齢、職階、勤続年数

#### 2. 3. 2 教員の価値観を探るための質問項目

- (1) 質問項目：あなたは中学生が中学校で美術を学ぶ価値をどのようにお考えですか。下の回答欄にお書きください。（記述式）
- (2) 質問項目：あなたが生徒にもっとも身に付けさせたいと考えている力はどのような力ですか。また、その力ともっとも関連するあなたの題材の概要をお教えてください。（記述式）
- (3) 質問項目：これから新しい学習指導要領で示されたより深い学びを実現するために、新しい単元づくりを行うとしたら、どのような内容を扱ってみたいですか。以下にあるキーワード（a）～（m）のうち、あてはまるキーワードに○を付け、その理由を下の回答欄にお書きください。（選択・記述式）

<キーワード>

- (a) 豊かな感性と美術 (b) 個性の確認と美術 (c) コミュニケーションと美術 (d) 美術の社会的機能 (e) 不

安からの解放と美術 (f) 癒しと美術 (g) 美術理解 (アートリテラシー) (h) 表現の自由を考える (i) 持続可能性と美術 (j) 多文化社会と美術 (k) 感覚と想像力と美術 (l) 美術の授業の必要性 (m) 情報と美術 (n) その他

### 3. 調査結果

本研究では質問項目「これから新しい学習指導要領で示されたより深い学びを実現するために、新しい単元づくりを行うとしたら、どのような内容を扱ってみたいですか」における回答結果を示す。

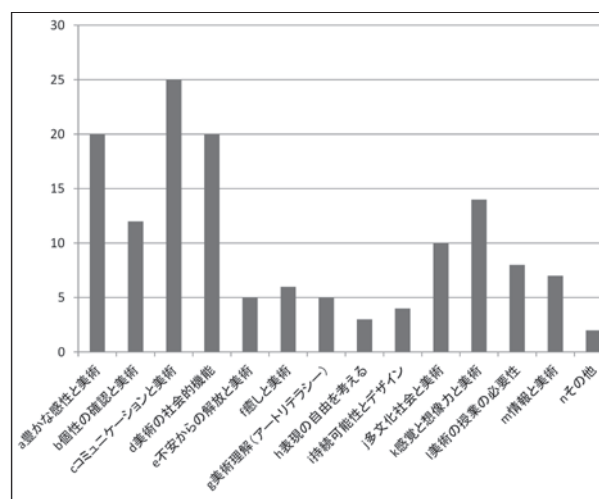
#### 3. 1 現職教員が扱ってみたいと考えている単元

扱ってみたい内容としてあげられた選択肢（複数回答可）は、上位から「(c) コミュニケーションと美術」(25件, 17.73%), 「(a) 豊かな感性と美術」(20件, 14.18%), 「(d) 美術の社会的機能」(20件, 14.18%), 「(k) 感覚と想像力と美術」(14件, 9.93%), 「(b) 個性の確認と美術」(12件, 8.51%) の順となり、この5つのキーワードへの回答が91件（全141件）64.54%と全体の半数以上を占めた〔表1〕〔表2〕。

表1 扱ってみたい内容（上位5件）

扱ってみたい内容（キーワード）	度数(件)	(%)
(c) コミュニケーションと美術	25	17.73
(a) 豊かな感性と美術	20	14.18
(d) 美術の社会的機能	20	14.18
(k) 感覚と想像力と美術	14	9.93
(b) 個性の確認と美術	12	8.51

表2 扱ってみたい内容 結果（度数）



#### 3. 2 キーワード選択理由のテキストマイニング結果について

テキスト分析用ソフトウェアを用いて単元を扱ってみたい理由にみられる単語を基準とするカテゴリー化を行い、回答者に共通するカテゴリーを確認して回答の関連性を分析した。なおここでは共通出現数3件以上のカテゴリーを分析の対象とした。<sup>4)</sup> カテゴリーズのもととなったソフトウェアが抽出した単語数は674項目であった。〔表3〕〔図1〕

共通出現件数が多かったカテゴリーから順に共通出現数4件以上のものを取りあげると、「作品」・「コミュニケーション」(6件), 「感性」・「社会・機能」(5件), 「生活・日常 身のまわり」・「社会・機能」(4件), 「社会・機能」・「関わる」(4件), 「自分」・「社会・機能」(4件), 「自分」・「作品」(4件), 「自分」・「表現」(4件), となった。

表3 同時に出現するカテゴリー (上位20件分 全674項目のうち)

キーワード選択の理由 (共通出現件数) 全674項目							
No.	件数	カテゴリー	カテゴリー	No.	件数	カテゴリー	カテゴリー
1	6	作品(11)	コミュニケーション(11)	11	3	個性(7)	コミュニケーション(11)
2	5	感性(14)	社会・機能(15)	12	3	想像力(4)	感覚(7)
3	4	生活・日常 身のまわり(11)	社会・機能(15)	13	3	生活・日常 身のまわり(11)	つながる(6)
4	4	社会・機能(15)	関わる(8)	14	3	生活・日常 身のまわり(11)	表現(9)
5	4	自分(14)	社会・機能(15)	15	3	生活・日常 身のまわり(11)	関わる(8)
6	4	自分(14)	作品(11)	16	3	生活・日常 身のまわり(11)	自分(14)
7	4	自分(14)	表現(9)	17	3	知識(3)	自分(14)
8	3	つながる(6)	社会・機能(15)	18	3	自分(14)	関わる(8)
9	3	作品(11)	表現(9)	19	3	自分(14)	コミュニケーション(11)
10	3	価値(7)	社会・機能(15)	20	3	自分(14)	他者(5)

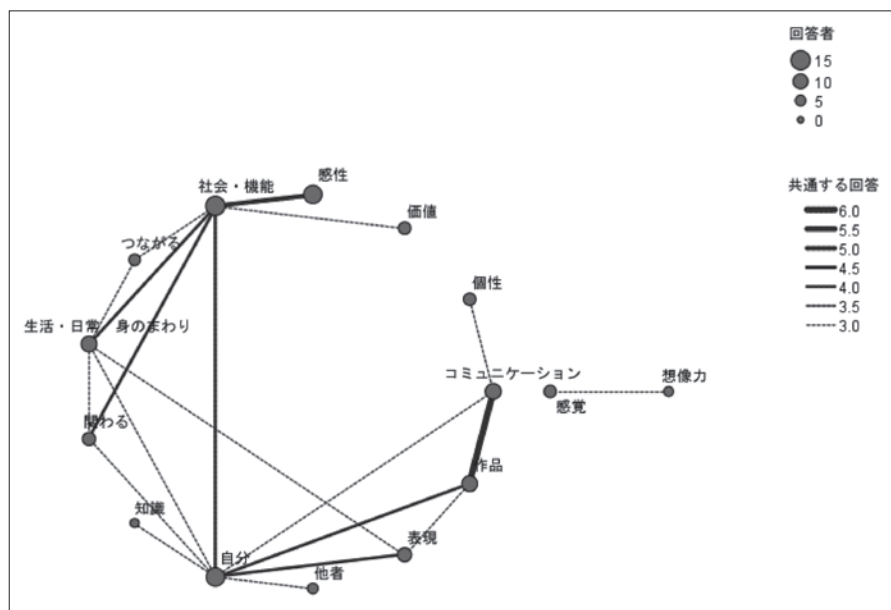


図1 共通出現数3件以上のカテゴリーのつながり図

### 3. 3 考察

上記の結果から本調査における中学校美術科教員は、①コミュニケーション、②感性・社会的機能、③感覚・想像力、④個性と美術の関連について単元を作りたい（教えてみたい）と考えていると思われる。あわせて、こうした回答の背景にある教師の意識として、テキストマイニングの結果から、①コミュニケーションは「作品」を介したコミュニケーションが意識されているであろうこと、②自己表現をベースに子ども達の感性が社会につながっていくものとして捉えられているであろうこと、③感覚と想像力とのつながりなどが意識されているであろうことが考えられる。

本研究ではこれらの結果を受け、大学生の授業理解を深める単元の主題を「コミュニケーションと美術」に定め、熟達した教員である共同研究者が実際に行っている（いた）単元や温めていたアイデアをベースに単元例を創作することとした。そして当該単元例の考察を通して、より汎用性のある単元モデル成立の要件を確認することとした。

（相田隆司）

## 4. コミュニケーションを主題とする単元例

### 4. 1 図画工作科単元例 1

#### 4. 1. 1 題材名

「次はどこへ？ カメレオンの旅」

#### 4. 1. 2 対象学年

小学校第6学年（全2時間）

#### 4. 1. 3 単元の目標・価値

カメレオンの形をした紙片を身近な場所の特徴（色・陰影・質感など）に合わせて着色して一体化させる活動Aと、デジタルカメラで班の友達が再現した擬態をコマ撮りアニメにして連結させていく活動Bを組み合わせることで、互いの発見や工夫のよさを認めながら自分のイメージを伝え合う過程で新たな発想を生み出す面白さを味わう。

#### 4. 1. 4 コミュニケーションについて

小学校高学年になると、子どもたちは自分が発見したことや表現にこめた思いについて自ら露呈しなくなり、表面的に称賛されることに満足しなくなる傾向がある。しかし心の奥底では自身の発想や成果の価値を再確認したい願いがあり、作品の魅力や工夫のよさを伝え合う場面を通して学習意欲を高めていく。本単元では、特設された鑑賞学習ではなく、造形活動に没頭する子どもたちの間に自然発生的で能動的な学び合いを起こしたいと考え、「表現と鑑賞の連続／往還」をテーマにかかわりの場を設定した。

#### 4. 1. 5 教師の価値観とコミュニケーション主題の関連

- ①ほんとうに教えたいこと（日々根底にある永続する価値観・願い）：同じ立場（条件）で身のまわりの事物や環境を見つめる視点には、自発的な鑑賞場面を生み出す動機づけが存在し、そこで感じ合う発想の差異や構想のプロセスを大切にしたいということ。
- ②単元のもつ本質的な問い：「場の変移により、ある形がもつ色や質感の特徴に新たな意味が生まれるか」について協働的に探る。
- ③カリキュラム・子どもとの関連：子どもたちが自信を持ちながら想像したことをもとに学び合う場をつくるには、以下のような5つの要素、1) 始めに取りかかりやすい条件設定と明快な動機づけ、2) 作品（作者）同士の関係性により意味が生成される空間的・心理的な余白、3) 発想の連続や練り直しを促す活動プロセス、4) 試行錯誤の途中経過について語り合う環境、5) 発達段階に適した伝達表現の方法やタイミング、が考えられる。従来の単元構成では、前述の活動A（全2時間）と活動B（2時間）を別々に実施していた。今回これらを組み合わせることで、授業時数の捻出と共に、思考過程における学習効果が上がることを期待した。
- ④大学生への意識：本単元の指導観として、紙片を周囲と一体化させるための物の見方や着色のスキルを駆使させるだけでなく、子どもたちが場所選びや撮影のプロセスで物語っている対話の内容に注目させたい。自分の紙片が友達のカメレオンへと擬態していく場面で起こりうる驚きや感動に立ち会い、双方の思いをつなぐための豊かな声かけや支援を試みてほしい。

#### 4. 1. 6 単元の指導計画（全2時間）

主な学習活動（時間数）	教師の指導・評価・留意点
活動のねらいを理解し（擬態場面を写した4コマ程度のアニメを提示しながら）、それぞれが自分の紙片を擬態させたい場所を探す。（20分）	・「色や質感の違い」「場のもつ特徴」の観点でイメージを出し合いながら、活動への興味を広げる。
場所のもつ特徴に注目しながら、一体化するように紙片を着色する。（40分） 4名グループで個々の作品を鑑賞しながら巡り、デジタルカメラで班の友達が再現した擬態の様子をコマ撮りアニメとして連結させる。（15分）	・児童の願いやイメージを引き出しながら、色合い・陰影・質感、等の観点から支援していく。 ・撮影したコマ送りアニメを画面で見返ししながら、互いの考えているイメージ（動かし方や物語性）と照し合せて話し合いを重ねているか、確認する。
撮影したアニメ作品を上映し、クラス全員で物の見方や発想のよさ、物語の面白さ等について話し合う。（15分）	・他の班の児童から見て、作品を通して表したいことが伝わっているか、感想や疑問を交わしながら再確認できるように促していく。

（大櫃重剛）

#### 4. 2 美術科単元例 1

##### 4. 2. 1 題材名

「お宝紹介！～『〇〇さんご愛用の…』～」



## 4. 2. 2 対象学年

中学校第2学年（全2時間）

## 4. 2. 3 単元の目標・価値

友達の「お宝」を紹介するプレゼンシートを制作し、それを紹介しあう活動を通して、伝えることに関わる美術の見方・考え方や働きなどについて理解を深めるとともに、伝え合うことの面白さや難しさなどについて考えを深める。

## 4. 2. 4 コミュニケーションについて

コミュニケーションは「伝えたい」「知りたい」という双方の思いから始まり、「伝わった!」「分かった!」という思いで一段落する。しかし一段落までの間には様々なやり取りが必要で、それこそがコミュニケーションである。「コミュ障」という言葉が示すようにコミュニケーションに苦手意識を持つ人も少なくないようだが、様々な受信・発信による「伝わった・分かった」感を積み上げることで、それぞれの個性に沿ったコミュニケーション力がアップしていくことは、幸せな人生につながると思う。

## 4. 2. 5 教師の価値観とコミュニケーション主題の関連

①ほんとうに教えたいこと（日々根底にある永続する価値観・願い）：学校で学んでいること＝「美術の見方・考え方」＝「どんな感じ?」「どうやって表す?」は、実生活の様々な場面で生かされているということ。筆者が生徒と造形活動を行う際に、常に掛け続けているのがこの「どんな感じ?」「どうやって表す?」である。美術の授業の中でこの問いに基づいて感じたことを掘り下げ、形にし、交流しあうことから育まれる力は、自分たちの生活や社会とリアルにつながっていることを実感させたい。②単元のもつ本質的な問い：美術の見方・考え方は、コミュニケーションに、どのように使えるのか?③カリキュラム・子どもとの関連：ポスターやマークなどに表す表現活動は伝達デザインの題材として永く扱われてきたが、多くの場合、個人で取り組む学習課題であった。それに対し二人組で取り組む本題材は、学習の過程で何度も受信・発信のやり取りが繰り返される。このやり取りを通して「お宝」の実物の存在感（＝色・形・材質感など）や持ち主の思いなどを深く感じ取り、そこから生み出された主題を表現するための「レイアウト、キャッチコピー、配色、書体」などの造形要素の重要性を理解するとともにそれらを使いこなす力をつけていく。二人組がクライアントと制作者に成り代わりながら、お互いの「お宝への思い」を一枚のプレゼンシートにまとめ、紹介しあうことを通して、コミュニケーションや美術の見方・考え方の意義や価値、そしてともに学校生活を送る仲間の有り様についても、理解を深められることを期待する。

④大学生への意識：日常的にSNSなどを使ってコミュニケーションを楽しんでいる大学生に対し、そのような行為にはたくさんの美術的な見方・考え方が介在しており、日々そのような行為を繰り返すことを通して、学んでいる（感性を研ぎ澄ませている）という意識を持ってほしい。そして、私たちの日常的な行為が中学校美術授業の題材にもなりえるものだということらえもしてもらいたいと思う。

## 4. 2. 6 単元の指導計画（全2時間）

時間	主な学習活動（時間数）	教師の指導・評価・留意点
第1次（0.5時間）	2人組になり、相手から提示された「お宝」の良さや、「お宝」への思いを理解し、話し合いながらプレゼンコンセプトを生み出す。	・「お宝」への思いを多角的に引き出させる。その際、美術的な見方・考え方を必ず含めるようにする。
第2次（0.5時間）	パワーポイントの機能を生かし、相手の思いに沿ったプレゼンシートを制作する。 ①写真撮影→②話し合い・制作	・デザインを形作る「レイアウト、キャッチコピー、配色、書体」などの要素を抑えさせる。 ・画面を見ながら話し合いを繰り返し、コンセプトの実現状況を確認しながら、表現を高めていくように働きかける。
第3次（0.5時間）	出来上がったシートをクラスで発表しあい、伝えるデザインの可能性やコミュニケーションの重要性について理解を深める。	・表現の多様な在り方を紹介し、各表現に「どんな感じ?」「どうやって表す?」がどのように実現されているのか、考えさせる。

（濱脇みどり）

#### 4. 3 美術科単元例2

##### 4. 3. 1 題材名

「アートの力!? メッセージ展」

##### 4. 3. 2 対象学年

中学校第2学年（全8時間）

##### 4. 3. 3 単元の目標・価値

社会へのメッセージ性のある展覧会をグループで企画し、「アートの発信者」としてアートとの関わり方に働きかける。また、グループ活動において、展覧会テーマの「共通」と、各自が選ぶ展示内容の「差異」のもと、展示内容の検討におけるコミュニケーションを通して、鑑賞のみかたの拡張と内容の深化を促し、アート鑑賞に親しむ姿勢を養う。

##### 4. 3. 4 コミュニケーションについて

コミュニケーションは、自己を発信し他者に受信してもらうこと、他者からの発信を自己が受信すること、そして、これらのやりとりの中で自己理解や他者理解をしたり、みかたの広がりや深まりを生み出したりしていくことであり、今日の学校教育において重要なエッセンスと捉えている。そしてコミュニケーションを介した学び合いの場は、学習活動や学習内容における生徒の興味を引き出すことができ、その中で仲間との経験の共有が増えることにより、一層に興味を引き出すことができる。また、そこからの興味関心の高まりは、その学習効果の高まりを促すと考えている。

##### 4. 3. 5 教師の価値観とコミュニケーション主題の関連

①ほんとうに教えたいこと（日々根底にある永続する価値観・願い）：生徒に育ませていきたい姿として、「学び問い続ける力」を軸にしている。それは、子どもを基点として、生涯にわたり、学びと問いの営みの中で、主体的に関わり続けようとする力のことである。自己に問い、他者に問い、そして自己にまた問う営みを繰り返しながら、学びの深化と拡張を繰り返す力である。本質的な学びとは、一問一答のような完結的習得には終わらない、無限の広がりを持つものであると考える。中学校での教育において、短期的な視野での知識・技能の習得に終わらず、長期的な視野を持ち、子ども自身が生涯にわたって拡張し、深化し、変革し合いながら、「学び問い続ける力」が培えるような働きかけを探っていきたい。②単元のもつ本質的な問い：この単元での本質的な問いは、「自分にとってのアートとは」、社会の中でのアートの機能性を意識した「メッセージ性あるアートとは」である。「自分はアートというものをこう考えている（自分のアート観）」を起点とし、生徒が視野を広く持って展示内容を収集させたい。また、社会に置けるメッセージ性あるアートに着目し、アートの機能性を意識させる機会としたい。また、この題材について、社会へのメッセージとしてのテーマがグループ学習での「共通」の基軸としたとき、そこに起こるみかたの「差異」から自己や他者への理解をし、鑑賞対象の特徴や効果、魅力について着目できると考えた。また、自分の考えを相手に伝えることや他者とのコミュニケーションを図ることにより、みかたを拡張させるだけでなく、自身の考えを深化させていくという効果があるとも考えている。③カリキュラム・子どもとの関連：「学び問い続ける力」を探究するための美術科の在り方として、「生徒が築く美術」を基盤としている。ここでは視覚的、造形的、体験的な美術の活動を通して、生徒自身が人の生と美術との関わりについて考えを築くこと、一人の生徒が、仲間とともに新しい物事と出会ったりみかたを変えたりしながら思考を巡らせ、他者とともに、自身の内にある思いや願いや考えを見出し、自己の価値観を築きながら、生きる姿に波及していくことを目標にしている。そのための手立てとして、中学校三年間のカリキュラムを通し「自分にとってのアートとは？」という問いを生徒一人ひとりに預けている。「アート」という言葉とその実態の捉え方は、時代によって、社会によって、個人によって異なり、また変化し、その捉え方はあいまいさと柔軟を持つ。そうであるのであれば、その「アート」という言葉について、生徒自身がその意味や存在の定義を構築できるキーワードとなると考えた。アートであるものとアートでないものとの境界に対して、学習活動を通して問いを重ねていく。この題材においても、自分のアート観を基準にメッセージ性のある展示アートを選んでいく。また、ここに紹介する題材は中学校二年生での活動であるが、社会性への意識の高まりが伺える時期に働きかけ

ていきたい課題でもあった。アートが自己を表現するものだけにとどまらず、社会における機能性をもち存在するものとして、見直す機会としたかった。④大学生への意識：「生徒が築く美術」の授業において、「教師が教える」ことが中心にあるのではなく、「生徒が問う」ことが中心にある。そして、生徒が主体的に問うことのできる環境を作り出していくために教師が存在するということが役割の中心にあるということを伝えていきたい。「問い」についての答えを持っているのは生徒たち自身であり、教師は生徒たちの持つ「問い」を深めるための手立て（情報の提供やみかた、展開、環境、声掛け等）を必要な時に与えていく存在であるということである。

#### 4. 3. 6 単元の指導計画（全8時間）

時間	主な学習活動（時間数）	教師の指導・評価・留意点
第1次（1時間）	グループ（4～5名）で、「～には～が必要である」をもとに、展覧会テーマの設定への話し合いを通し、社会や自分の身近に起きている問題に着目していく。 アートのメッセージ性としての機能に着目し、メッセージを伝え得る展示アートを探す。	・アートとして受け止める側の受信者、アートを作り出したり発表したりする側の発信者の立場を踏まえ、「アートの発信者」として展覧会を開くことへの理解に繋げる。 ・社会全般の問題からだけでなく、身近なところでの視野も含めてテーマ設定をするよう呼びかける。
第2次（2時間）	展覧会テーマのもと、各自で収集してきた展示アートの内容についてグループによる検討会を行う。	・展示テーマの説得性について再確認し、展示アートの再収集の手立てとする。 ・質疑応答により、納得したり、反論したりしながら、相互にアートの捉え方を整理できるよう生徒に促す。
第3次（3時間）	展示内容を決定し、展示ポスターを構想、制作する。	・展示ポスターにおいて、効果的なレイアウトを構想・作成する。 ・グループ全体でねらいを共有しているか、コミュニケーションが取れているか配慮する。
第4次（2時間）	企画の発表を通し、班で話し合ったメッセージ展についての概要と、展示するアートについて他者に伝える。 →発表時間は一班で約10分（質疑応答含む） ①企画全体のコンセプトについて ②各自の展示アートについて 発表への質疑・応答 発表についての感想の記入	・必要に応じて、発表する側、聴く側とのコミュニケーションを促す。

（大根田友萌）

#### 4. 4 図画工作科単元例2

##### 4. 4. 1 題材名

「造形カルタ」

##### 4. 4. 2 対象学年

小学校第4学年（全2時間）

##### 4. 4. 3 単元の目標・価値

本題材は「カルタ遊び」の手法を用いた、鑑賞活動の実践である。読み札に書いたことばのイメージを、形や色で絵札に表し、カルタ遊びをする。『造形カルタ』で、それぞれの表現やイメージの違いに気付く、楽しみながら充実した鑑賞活動が行われることを期待した。

##### 4. 4. 4 コミュニケーションについて

中学年の造形活動では、友だちと関わりながら、自ら進んで表現するとともに、友だちの表現にも眼差しを向け、それぞれの作品のよさや面白さ、いろいろな表し方などについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げようとする姿が期待される。互いの表現を「知りたい」という、他者理解の姿が、子どもたちの創造的な力を発揮



させ、ものごとに対する「私」という視点が更新されていくこととなる。

#### 4. 4. 5 教師の価値観とコミュニケーション主題の関連

- ①本当に教えたいこと（日々根底にある永続する価値観・願い）：これから様々なものやこと、また人と出会う子どもたちに、ものごとに対する多面的・多角的な眼差しを育成したいと考えた。「みかたをかえる」ことで、一つの「もの・こと」にも、多様な意味や価値があること、さらには自らがそこに意味付け・価値付けしていけることを感じさせたい。
- ②単元のもつ本質的な問い：造形活動をとおして、お互いの形や色に対するイメージと向き合うことで、もの・ことに対する多様な見方や考え方に会おう。
- ③カリキュラム・子どもとの関連：本単元では形や色に対するイメージを、ことばを媒介にして膨らませ、またそのことばを絵札として表現することにした。友だちとその絵札と読み札を使いカルタ遊びをすることで、個々の表現のよさやイメージの違いにも気付かせたいと考えた。『造形カルタ』づくりをとおして、形や色への興味・関心が深まるとともに、子どもたちに多様な見方や感じ方を培いたいと考える。なお『造形カルタ』の絵札には、読み札に対応すると思う形や色彩（配色）を、色紙や雑誌の切り抜きを貼ったり、また絵の具やクレヨン、カラーペンなどで着色したりすることにした。
- ④大学生への意識：これまで「教わる側」にいた学生が、はじめて「教える側」になった時、多くの学生は「何を教えるか」ではなく「どの様に教えるか」に、その力点が集中する。しかしその具体を追求するあまり、その活動をとおして何を学習させたいのかが不明瞭になることがある。表層的な面だけでなく、その根底にある教育的問いに触れさせることで、教育、また美術のもつコミュニケーションの役割に触れさせたい。

#### 4. 4. 6 単元の指導計画（全2時間）

主な学習活動（時間数）	教師の指導・評価・留意点
それぞれが「色」に対してどのようなイメージをもっているのかを、具体的に示された「色」を基に振り返る。（20分）	・児童の日常生活とも関連付けながら、活動への興味・関心を広げる。
「さわやかな色」など、語尾に「色」がつくことばを考え「読み札」に書く。（10分）	・児童が「色」がつくことばを書けるように、グループで話しながら考えるようにする。また同じことばがグループで重ならないよう調整するよう促す。
読み札のことばからイメージした形や色を、色紙の切り抜きなどをつかってカードに表し、「絵札」をつくる。（30分）	・ことばから形や色がイメージできるよう、具体を示すなどして支援する。
つくった「造形カルタ」を使ってカルタ遊びをする。（鑑賞）（30分）	・カルタ遊びを通して、それぞれの表現やイメージの違いに気づき、楽しみながら充実した鑑賞活動が行われるよう、促す。

（西村德行）

### 5. 造形活動におけるコミュニケーションの位置づけと期待価値

前章であげた題材において実践者が注目している要件は、大別して三つに分類することができる。一つは、児童生徒の関心問題と題材の目標や内容に準拠した主題の妥当性であり、二つ目は、コミュニケーションの話題になる内容、そして三つ目は、対話のエントリー・ポイントに導く環境や相互主体的な発話を促す学習形態である。これらの要件から実践者が共通して期待することは、造形指導という近い目標に収斂されることなく、美的な体験を希求する「生きる姿」として描かれる。こうした要件の特徴を基に、造形活動におけるコミュニケーションの位置づけと期待できる意義や価値について考察していきたい。

第一の児童生徒の関心問題と主題の妥当性については、アニメーション、お宝、自らの感性で定位するアートや「色」の概念など、日常と切り離せないメディアや生活感情に根ざすモチーフを用意していることが特徴である。表現と鑑賞が往還する活動や思考のサイクルを通して、最初に採り上げられたモチーフは隠れていた特徴的側面を見せ、学習者の認識を変容させていく。もともと興味のあるモチーフや主題の捉え方が変化することは、主観的な関心の枠組みを超えて他に伝えたい「発話の助走路」となる。また、その助走は自他の見方・感じ方の違いやよさを

認める志向的態度を整えたレディネス（準備）を導く。また、各自の内面で起こる関心の変化や友人とのあいだに生起する見方のズレは、安直な合意形成に終わらない議論の継続にも役立つ。第二の、コミュニケーションの話題になる内容については、「形や色、質感や動き」といった材料や場所の特徴を手掛かりにするもの、「動かし方や物語性」あるいは「レイアウトやコピー」などのように表現の様式や技能に関するもの、そして「アートの作り手と受け手の立場」やそれぞれが「見いだす意味との差異」、「ことばの視覚化」など、概念イメージの結び方に分類できる。こうした内容について、より創造的に問題解決を図ろうとするコミュニケーションでは、他者の目を借りて対象や事象を捉え返すような、いわば主客融合した眼差しが求められる。視線の先にある「ひとつのものやこと」を多義的な見方で捉え直すことは、つくりだす喜びの基体になる「意味や価値」を増幅したり、新しい感覚や認識に向かう直感を促したりすることが期待できる。意味や価値のバージョンは他者意識に裏打ちされながら更新されていくだろうと推察できるが、新しい認識が表現や話し言葉を介して批評の場に登ることこそが、最も注目したい場面だろう。

一方で、表現としても言葉としても、実は想定した内容の総てがそっくり他に伝わる可能性は低い。伝わるのは常に部分であり、その部分が象徴する全体が自分のイメージに似ていれば、表現はほぼ成功したことになる。その不完性を前提に共感していく社会性を自然な態度として受け入れることも、視覚メディアや言語を介するコミュニケーション経験の有意性を支えている。児童・生徒のライフ・ストーリーはさまざまであり、見方・感じ方は異なる。が、繰り出される表現や言葉は、共有する文化の中で培われたレリバンス（妥当性）を有するはずだからである。第三の、対話のエントリー・ポイントに導く環境や相互主体的な発話を促す学習形態については、「感想や疑問を交換する場」の設定や「発想の差異や構想のプロセス」を契機に対話・談話が展開する身の配置、「個の表現を連結するグループ形態」の活用、「クライアントと制作者という制約と分業」の活用、「表現を推敲したり、意見を交わすペア」の設定、「カルタ遊び」という形態を生かした眼差しの共有、などである。

こうした学習形態や環境のもとで展開するコミュニケーションから期待される価値は、経験の共有にほかならない。ただし、前述したように、この共有とは安易な合意や共感を目指すものではない。話し手たる「自我」の主観を晒し、相手の目に映る「他我」を認める営みとして位置づけられる。自分の中に他者から引用した知見を見出したり、相手の目を借りて見る自分を認めたりすることは、譲れない「わたし」と「わたしたち」という世界観がバランスよく共存していることを意識する機会である。もう一つの価値は、形や色などの「造形言語」や、材料・用具を扱う身振りといった「身体言語」を用いて制作する環境では、目に見えるもので伝達を試みるビジュアル・コミュニケーションが可能になることだ。「発話言語」だけに頼っていないという点では、環境がもたらす価値が圧倒的に大きい。形や色を言葉のように使う視覚的な対話は、声なき空間にも語りを生むからである。また、相互鑑賞や独立した鑑賞などのディスカッションで「道具」となる発話言語も、ただ一つの正答を期さないだけに、仲間に引用されたり収奪されたりしながら、しだいに意味や価値を拡張していく特性をもつと推察できる。これらの期待価値は、造形的な感性の振りを協働的に広げる学習への参加を促すもの、あるいは対話の密度を高め、互いの企てや遊びを見極めながら進む議論に必要な創造的な思考を育むものと捉えられる。

(立川泰史)

## 6. 考察

本研究の単元例の要件を、立川が前章で「一つは、児童生徒の関心問題と題材の目標や内容に準拠した主題の妥当性であり、二つ目は、コミュニケーションの話題になる内容、そして三つ目は、対話のエントリー・ポイントに導く環境や相互主体的な発話を促す学習形態である」と喝破している。単元例を示した熟練した教員である共同研究者は「コミュニケーションについて」をめぐって、それぞれ「造形活動に没頭する子どもたちの間に自然発生的で能動的な学び合いを起こしたい（大櫃）」、「様々なやり取りが必要で（中略）様々な受信・発信による『伝わった・分かった』感を積み上げること（濱脇）」、「やりとりの中で自己理解や他者理解をしたり、みかたの広がりや深まりを生み出したりしていくこと（大根田）」、「互いの表現を『知りたい』という、他者理解の姿（西村）」と述べている。いずれもがコミュニケーションの多様な局面に着目した学習主題化を実現していることが理解できるとともに、学習主題と児童生徒への深い次元での理解と彼らの教科観が染みこんだ単元内容となっていることがわかる。

また、「教師の価値観とコミュニケーション主題の関連」における「④大学生への意識」として、それぞれ次のように述べている。「子どもたちが場所選びや撮影のプロセスで物語っている対話の内容に注目させたい。（大櫃）」、

「日常的な行為が中学校美術授業の題材にもなりえるものだというとらえもしてもらいたい。(濱脇)」, 「生徒が主体的に問うことのできる環境を作り出していくために教師が存在するということが役割の中心にあるということ(大根田)」。「根底にある教育的問いに触れさせる(西村)」。濱脇は、日常にあるコミュニケーションが学習主題になり得ることへの気づきへの期待を表明している。この濱脇の述べる日常の事象を掘り起こして単元・授業へとつなげていくという意識は、教科で「何を」学ぶのかといったことを常に更新し続けようとする意識であり、その根底には西村が述べる、教師の価値観形成への期待がある。また、大櫃、大根田が述べるコミュニケーションと探究がもたらされる学習環境づくりへの配慮は「どのように」学ぶかといった、常に最善の方法を模索しようとする意識であると考えられる。ゆえに本研究における熟練した教員による単元づくりからは、(1) 学習主題への深い理解や解釈、(2) 学習・活動・探究方法の選択への意識、(3) 授業全体構造や学習環境への意識、という3層への意識が明らかとなったといえると考えられるが、教員養成学部生に授業理解を深めさせるための単元づくりをめぐる今後の探究においては、日常的な事象が学習主題化されるプロセスを(追)体験させながら、熟練した教員が示す上の(1)(2)(3)への意識の存在と意味に気づかせていくことが有力な方略として考えられる。

(相田隆司)

**助成** 本研究は「平成29年度科研費(基金分)基盤研究(C)(課題番号:17K04749)の助成を受けている。

## 注

- 1) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)概要p.6
- 2) 「平成28年5月26日教育課程部会芸術ワーキンググループ資料2 芸術ワーキンググループにおける取りまとめ(案)」p.8
- 3) 相田隆司, 立川泰史, 西村德行, 大根田友萌, 大櫃重剛, 濱脇みどり「熟練教員の題材をめぐる大学生の実践的理解の様相に関する一考察」, 教材学研究, pp.7-18, 2019年
- 4) IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1® 使用。同ソフトにより自動抽出, 作成されたカテゴリーをもとに筆者が単語を取捨選択して分類。全72件の自由記述を対象とし, ソフトが挙げた記述語674項目のうち, 特に価値観に関係すると考えられる語及びそれを修飾する主たる語の計104項目(39カテゴリー)を作成し分析した。